

関ヶ谷市民の森愛護会

(平成20年度第6回役員会決定事項等)

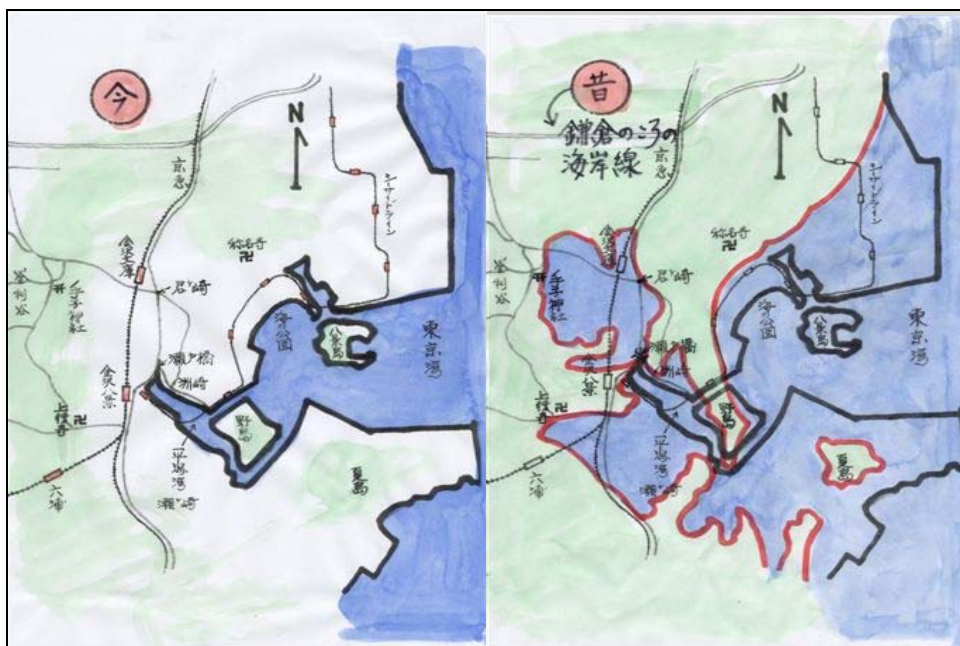
平成21年3月7日

金沢文庫の今昔

私たちが現在住んでいる金沢文庫から金沢八景にかけての地形は、今と昔とでは随分異なっていたらしい（下図参照）。これらの地域が賑わった鎌倉や江戸のころは一体どのような状況だったのだろうか？

〔I〕 鎌倉のころ

今の金沢区のあたりは、鎌倉の頃は「六浦荘（ムツラノショウ）」と呼ばれ、六浦郷、金沢郷、釜利谷郷、富岡郷からなっていた。そして、当時は未だ海であった上行寺の門前から瀬ヶ崎、洲崎にかけては「六浦湊（ムツラノミナト）」と呼ばれ、鎌倉材木座海岸沖の「和賀江島」とともに、鎌倉幕府の二大輸入港の一つとして繁栄した。とくに、「六浦湊」は対岸の房総半島からはもとより、当時は東京湾に流れ込んでいた利根川、荒川、入間川などの大川を通じて関東平野の隅々からもたらされる物資の集積港として賑わった。



そして、このような六浦荘を重視した北条三代目執権「北条泰時」は、1241年「朝比奈切通」を開削して六浦から鎌倉への物資の輸送路を整備するとともに、弟「北条実泰（サネヤス）」を六浦荘の領主として釜利谷郷に居を構えさせたと推定される（実泰夫人が「六浦殿」と呼ばれた記録や実泰自身も「釜利谷殿」と呼ばれた痕跡が残っている）。

当時の六浦荘には「瀬戸入海（セトノイリウミ）」と呼ばれる大きな内海が広がっていた。この内海は現在の瀬戸橋の北側から釜利谷、文庫駅周辺、君ヶ崎、洲崎まで入り込む広大なものであったため、干潮時には内海の海水が狭い瀬戸海峡を平潟湾へと一挙に抜け出る激流が生じ小船では対岸へ渡るのも困難な状況にあった。このように瀬戸の難所に阻まれた金沢郷は広大な瀬戸入海を隔てた辺境の地であったのに比して、六浦湊の後背にあり鎌倉にも陸路で近い釜利谷郷がより重んぜられたものと見られる。

しかし、実泰の子「北条実時（サネトキ）」は、名執権とうたわれた時頼や時宗などを補佐し常に幕政の枢機にある傍ら美しい金沢の地を愛し、1258年頃には金沢氏として金沢郷に居館を構えとともに居館内に念仏堂としての「称名寺」を建立して律宗仏教の保護に努めた。実時はまた非常な読書家としても知られ晩年蓄積されたであろう大量の蔵書を鎌倉から金沢・称名寺に移したのが「金沢文庫」の始まりとされている。また、記録によれば、実時の時代に瀬戸海峡に「世戸堤」なるものが構築されたとあるが、これは恐らく瀬戸架橋の準備工事であったとも推測されている。

六浦荘の支配について金沢氏が隆盛を極めたのは実時の孫の「北条貞顕（サダアキ）」の時代であった。貞顕は、祖父や父顕時（アキトキ）の好学の精神を受け継ぎ、古典や内外の朝廷制度を学びつつそれらに係る書物を収集して「金沢文庫」の一層の充実に尽くした。また、実時の頃からの夢でもあった「瀬戸橋架橋」を称名寺に命じ難工事のすえ成就させた。確かに、実時以降の金沢氏三代が本拠とした金沢・称名寺へは、鎌倉からは白山道を経由して釜利谷方面から山道を辿るか、六浦湊からの渡し船で対岸に渡り洲崎を経由して参詣するかのいずれかの方法によるしかなかったため、難所の瀬戸海峡を橋で結び六浦と金沢・称名寺を直結させることは金沢氏にとって永年の悲願であったに違いない。瀬戸橋造営のための膨大な経費が主として金沢氏と称名寺の荘園に賦課される棟別銭によって賄われたことから肯ける。

その後1315年に連署（執権に次ぐ地位）に任ぜられた貞顕は、北条一門の首脳として活躍し、1326年には遂に幕府の最高権力者「第15代執権」にまで上り詰めるが、幕府内の抗争によってわずか十日ほどで退任し、1333年鎌倉幕府が新田義貞によって滅ぼされるに及んで最後の執権「北条高時」とともに鎌倉東勝寺で自刃した。それを期に、鎌倉をはじめ六浦荘も六浦湊も急速な衰退を余儀なくされた。

〔II〕江戸のころ

江戸のころは、六浦・金沢周辺は幕府の直轄地天領に加えられ、旗本の「米倉保教」が代官としてその陣屋を皆川から瀬戸に移して来た。そのため瀬戸は治安が回復し流通の拠点として復興するとともに、瀬戸の「金龍院」が「金沢八景」の中心となって観光地としての賑わいも取り戻した。とりわけ江戸庶民に人気があったのは、大山、江ノ島、鎌倉、金沢を巡る観光コースで、なかでも金沢の瀬戸入海は江戸時代にはその大半が浅瀬と化し潮が引くと広大な干潟に変貌するダイナミックな景観が見ものであった。この金沢八景は、明（ミン）からの来日僧である「心越禪師」がその故郷杭州の西湖を想いながら詠んだ漢詩によって有名になったもので、能見堂からの眺望によって「洲崎晴嵐」、「瀬戸秋月」、「小泉夜雨」、「乙鱸帰帆」、「称名晚鐘」、「平潟落雁」、「野島夕照」、「内川暮雪」の八ヶ所の見所が詠い込まれている。

17世紀も半ばを過ぎると六浦と金沢を隔てていた瀬戸入海は、江戸湯島聖堂の儒学の教官であった「永島泥亀（デイキ）」の新田開発によって埋立てが開始され、1668年には干拓は一応の成功を見た。その後、この「泥亀新田」は津波や台風の被害に悩まされ続けたが、その経営が真に安定を得たのは東京湾の海面が下がった江戸末期に至ってからであった。これによって瀬戸入海における新田開発と製塩業は大いに栄え永島家に多大の富を齎したと伝えられる。（宮本）

以下は、平成21年2月7日（日）開催の
「平成20年度第6回定例役員会」における決定事項等

[I] 今後の公式活動日

- 3月 7日（土）公式活動（樹林管理、竹垣、ほたるの里の整備等）
21日（土）公式活動（樹林管理、竹垣、炭焼き等）
4月 5日（日）公式活動（樹林管理、竹垣、ほたるの里の木道等）
18日（土）公式活動（ 同上 ）
5月 3日（日）公式活動（樹林管理等）

（注）各活動日の具体的作業内容の詳細は、当該活動日の数日前にご連絡します。

[II] 今後のパトロール予定

3月 1日（日）	川島 敏裕	照井 宣夫
8日（日）	立川 成江	門田 教与
15日（日）	篠原 英男	上原 隆一
22日（日）	鈴木 勲	永田 一彦
29日（日）	真鍋とめ子	雨宮 誉子
4月 5日（日）	吉田 文雄	梶田 良春
12日（日）	徳岡 正彦	山口 精一郎
19日（日）	外山 カオル	塩山 裕子
26日（日）	宮本 英男	宮本 久美
5月 3日（日）	萩尾 泰章	萩尾 和子
10日（日）	日高 清之	梁瀬 勉
17日（日）	野路美智恵	森紀美江
24日（日）	戸次 鎮治	戸次 明子
31日（日）	入部 信寿	吉澤 安永

（注）パトロールは、「巡回チェックリスト」によって行い、結果は、上記
「巡回チェックリスト」を、川島担当役員あてFAX（784-6063）か
メール（fwic4987@mb.infoweb.ne.jp）によって、ご報告して下さい。

[Ⅲ] クラブ等の活動状況等

(1) ほたる復活クラブ

- ① 「せせらぎ」と「平家ホタルの池」の縁をコンクリートと小石で高くして水漏れを防止するなど、渇水期にもログハウス内への流水を絶やさぬ補修を実施・完了した。
- ② 3月7日、「追い越池」の水を抜き、池内および「せせらぎ」周辺の落葉を取り除き「ほたるの里」全般の清掃を実施した。
- ③ 6月の「ホタル祭り」までには、「ほたるの里」内の古くなった木道の補強整備を行う予定。

(2) 木工クラブ

- ① (イ)「山の手入口」の物置裏に花壇等への水遣りのための雨水貯水枘、及び、(ロ)「たけのこの道」の簡易ベンチの設置作業は既に終了し、(ハ)「炭焼き小屋」裏手の簡易物置の設置は、目下、順調に組み立て作業が行われている。
- ② 今後ともメインの作業は「竹穂垣」造りとなろう。

(3) 炭焼事業

3月21日(土)の活動日は、奇数月の第二活動日に当り、炭焼きを実施する。火入れは午前7時の予定。多数の参加協力を期待。

[Ⅳ] その他

(1) 次期第7回定期年次総会の予定

平成21年度の予算審議や役員改選などを行う「第7回定期年次総会」は、来る4月11日(土)午前11時から、「関ヶ谷自治会館」において開催することが決定された。

(2) 総会議案審議のための臨時役員会の開催

「第7回定期年次総会」における議案を審議するための「臨時役員会」を、平成21年4月5日(日)、午後7時から、「関ヶ谷自治会館」において行う。

関ヶ谷市民の森愛護会会長 鈴木 勲

(新年度より連絡役が交替します。5年間有難う御座いました。宮本)